



東京女子医科大学看護系 VOL.12

同窓会会報

発行年月日 2012年11月10日
 編集 同窓会編集委員会
 発行 東京女子医科大学看護系同窓会事務局
 〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1
 東京女子医科大学看護学部内
 看護学部内 FAX: 03-3350-1521

目次	会長挨拶	1
	平成24年度東京女子医科大学看護系 入学生・卒業生数、同窓会会員数	2
	教員一覧	3
	第12回総会報告	4
	同窓生の動向	7
	東京女子医科大学看護の歴史	11

廣澤先生、藤枝先生、河合先生を偲んで	15
学園祭・部活動・ボランティア活動報告	19
研究助成金・学生ボランティア助成金	21
会則	22
お知らせ	24

平成24年度 第12回同窓会会報挨拶



山 嵯 住 江

同窓会会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。各方面でご活躍のことと存じます。同窓会は「看護専門職者として、看護の発展と社会に貢献すると共に、東京女子医科大学の看護の発展に寄与すること」という目的のもとに、第4期12年目になりました。先日、おかげさまをもちまして、4期最後の総会が無事終了いたしました。総会では、橋本葉子先生のお声かけや尾岸先生や大勢の先生方や卒業生・大先輩にお集まりいただき感謝申し上げます。

昨年3月にはあの未曾有の東日本大震災がありました。日本中が震撼とし、1年と5ヶ月がたった今でも不自由な生活等強いられている方は大勢いらっしゃると思います。被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。

現在、同窓会の会員数は6500名を越えております。ただし、住所の確実な会員は3700名ほどに留まっており、3000名以上の会員の住所が不明の状態です。同窓会では、会報やホームページより随時、母校の状況などについてお知らせしております。皆様の周囲に会員でいらっしゃるにもかかわらず、同窓会からの通知等がお手元に届かないという方がいらっしゃれば、同窓会事務局まで住所を教えていただければ幸いです。

す。また、住所の変更につきましても同窓会ホームページから簡単に手続きできますので、どうぞご活用ください。また、同窓会の活動は、ホームページで紹介しておりますので、是非ご覧ください。

専門学校・看護学部・大学院では、毎年およそ180名の学生が卒業し、同窓会会員になります。卒業生の半数以上の学生が看護師、助産師として本院・東医療センター・青山病院・八千代医療センターに就職し、活躍しております。

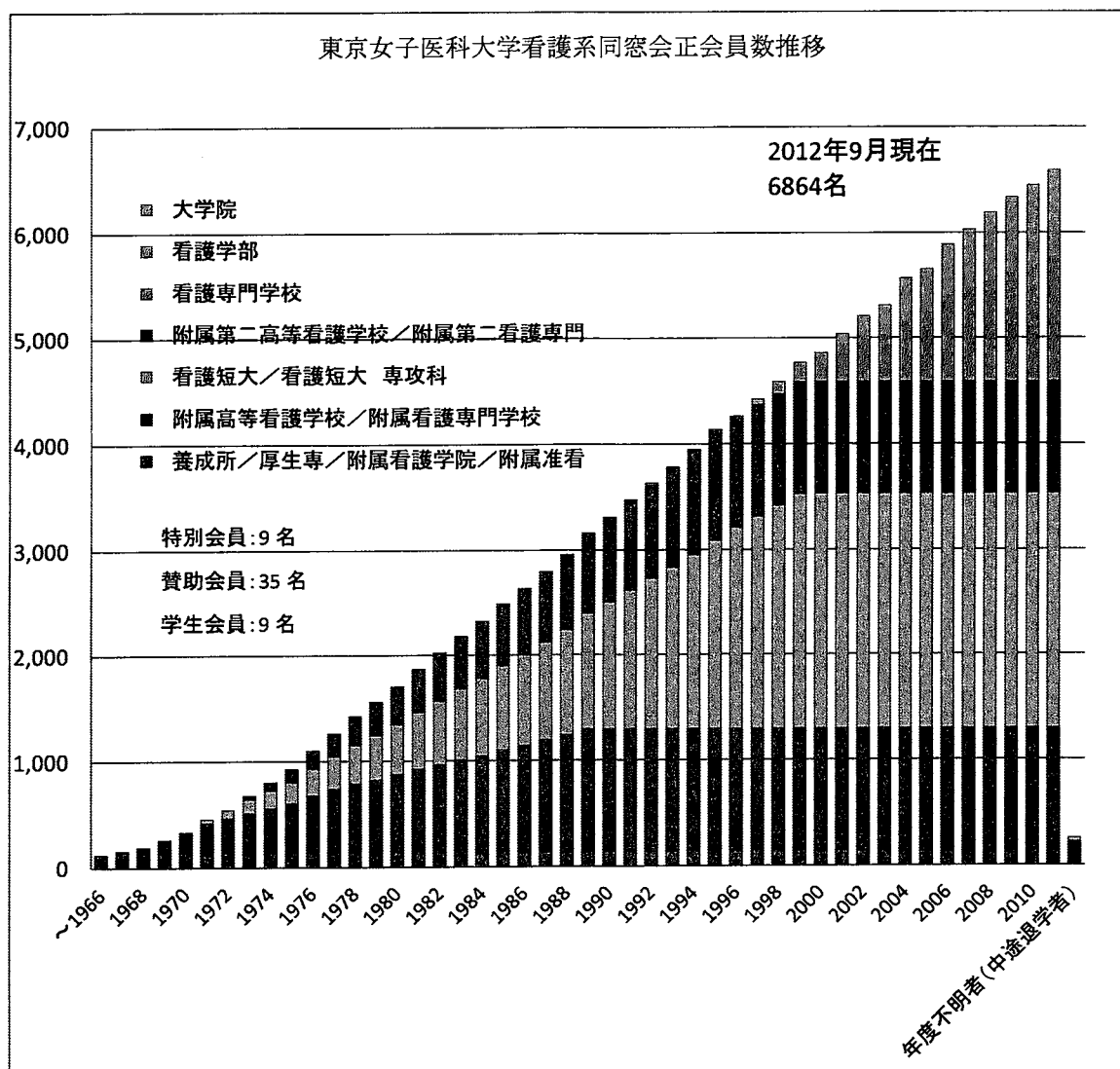
看護学部では、国際交流が30年以上にわたって活発に行われています。また、米国のアルバーノ大学、ハワイのパンフィック大学に加え、今年度から韓国の梨花女子大学と相互に50名余りの学生が学んでいます。さらに看護を究めようと意欲をもって大学院に進学される方も増えております。博士前期課程には実践看護学・看護職生涯発達学・看護管理学・食看護学・基礎看護学があり、主として研究者、また専門看護師として活躍できる方を多く輩出しています。また、博士後期課程には実践看護と看護基礎科学があり、看護学の研究を創造的に自立してできる研究開発を担う人材が育成され、看護界をリードする人材の育成に力が注がれています。

第12回総会では、専門看護師であり、看護学部で教員もされておりました同窓生の山内典子さんに看護職員の「メンタルヘルス支援」に関する講演をお願いしました。毎年総会では、関心の高いテーマがとりあげられておりますので、皆様のご意見やご希望をお聞かせください。

最後になりますが、私事ながら、今回で会長という職の任期を終了いたします。長年にわたりご高配賜り、誠にありがとうございました。今後とも東京女子医科大学看護系同窓会へのご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

平成 24 年度東京女子医科大学看護系入学生数
 /平成 23 年度東京女子医科大学看護系卒業生・修了生数

	平成 24 年度入学生数	平成 23 年度卒業生・修了生数
看護学部	92	97
看護専門学校	88	72
大学院博士前期課程	13	19
大学院博士後期課程	4	4



平成24年度 看護学部・看護専門学校教員一覧

【看護学部】

■基礎科学系

生化学	准教授	伊東	栄子
生理学	准教授	神山	暢夫

■人文社会科学系

心理学	准教授	松寄	英士
社会学	准教授	諏訪	茂樹
英語	教授	木村	みどり

■臨床医学系

内科学	教授	荒井	純子
外科学	准教授	尾崎	恭子

■看護学系

基礎看護学	教授	山元	由美子
	准教授	守屋	治代
	准教授	菊池	昭江
	講師	見城	道子
	講師	加藤	京里
	助教	味木	由佳
	教授	下平	唯子
	准教授	金子	真理子
	講師	原	三紀子
	講師	落合	亮太
	講師	益田	美津美
	助教	三浦	美奈子
	助教	原	美鈴
助教	小林	礼実	
助教	松岡	志帆	
教授	佐藤	紀子	
准教授	吉田	澄恵	
教授	小川	久貴子	
講師	竹内	道子	
講師	原田	通予	
講師	宮内	清子	
助教	飯塚	幸恵	
助教	中北	充子	
助教	井上	友里	

成人看護学

看護職生涯発達学

母性看護学

小児看護学

老年看護学

地域看護学

精神看護学

認定看護師 教育センター

教授	日沼	千尋
准教授	関森	みゆき
講師	奥野	順子
講師	青木	雅子
助教	櫻田	章子
教授	水野	敏子
講師	小山	千加代
講師	坂井	志麻
助教	井澤	玲奈
助教	原沢	のぞみ
教授	柳	修平
教授	伊藤	景一
准教授	中田	晴美
講師	服部	真理子
助教	犬飼	かおり
助教	遠藤	直子
特任助教	小澤	麻美
教授	田中	美恵子
講師	小山	達也
講師	嵐	弘美
助教	異儀田	はづき
助教	飯塚	あつ子
講師	草柳	かほる

【看護専門学校】

主事	小川	悦代
	秋山	千里
	杉山	貴子
	濱谷	敦子
	柳沼	厚子

栗原	正子
芥川	友紀恵
高橋	ゆかり
平井	優子
山本	恵子

石川	徳子
軽部	由有子
田中	美由紀
舟橋	陽子

藪	絵美子
小林	裕美子
沼尻	裕美
村上	由香

東京女子医科大学看護系同窓会 第12回総会報告

日時：2012年6月9日（土）13：30～14：10
会場：東京女子医科大学看護学部123教室

開催に先立ち物故会員への黙祷が行われた。次いで、山崎住江会長の挨拶の後、橋本葉子様よりお言葉をいただいた。第12回の同窓会総会は議長に山本るり子氏、書記に中村スズ子氏が選出された。

なお、開催時の出席は理事18名、一般63名の計81名と報告があり、第4章13条2)に基づき総会が開始され、以下の議題について、報告並びに審議された。

議 題

1. 平成23年度事業報告
2. 平成23年度決算報告
3. 平成24年度事業計画案
4. 平成24年度予算案

審 議 事 項

(1) 平成23年度 事業報告

<庶務>

1. 理事会・代議員会での司会、書記担当表作成
2. 理事会および代議員会議事録配信
3. 理事・代議委員名簿作成
4. 会員証の発行
5. 議事録管理
6. 会員名簿管理（株式会社サラトへ委託）
 - 1) 看護学部・看護専門学校・大学院卒業生名簿登録
 - 2) 名簿修正依頼
 - 3) 配布物返送分の整理、名簿修正依頼
 - 4) 正会員数3719名（大学院生会員8名、特別会員9名、賛助会員27名）
7. 会員慶弔時手続き

<学生支援>

1. 同窓会オリジナルグッズの販売
第7回東京女子医大看護学会学術集会、本院看護研究発表会、看護学部卒業式、その他随時販売したクリアファイルの発注5000枚
2. 臨床看護師への研究助成
募集要綱の提示：ホームページと会報
今年度は申請無し

<総会>

1. 2011年度 第11回看護系同窓会総会
2. 東日本大震災の影響を考慮し、資料送付による紙面総会の開催とした
発送数 3540通 返送数 1通（住所不明）
内訳 承認：570通、承認不可：1通、不明：3通
3. 返信のない時は承認していただいたものとしたため3535名(3540-5)の承認が得られたものとし、2010年度事業報告、決算報告、2011年度事業報告、予算案は承認された

<会報・ホームページ>

1. 看護系同窓会報第11号の発行
2. 看護系同窓会ホームページの更新・運営
・「ホームページ掲載申請書」の様式の作成およびアップ
・「資料同封申請書」の様式の修正と更新
・看護系同窓会報第11号のPDFのアップ
・東京女子医科大学看護学会のホームページのリンクバナーの設置

上記について、山元由美子副会長から報告があり、賛成多数で承認された。

(2) 平成23年度 決算報告



古藤小枝子会計担当理事から報告があり、引き続き会計監査より同窓会会則第5章第20条に基づく会計監査結果、不適切な事項はなく正確に処理されていたとの報告があり、賛成多数に承認された。

(3) 平成24年度事業計画

<庶務>

1. 会員名簿管理（株式会社サラト委託継続）
2. 会員証発行（2012年度卒業生、各会員からの申請時）
3. 理事会・代議員会議事録管理（保管、理事・代議員へ配信）
4. 会員慶弔時の手続き
5. 特別会員、賛助会員へ年賀状発送
6. 同窓生、その他問い合わせの対応
7. 同窓会室備品・物品管理・整理整頓
8. 各担当の業務内容をファイリング、保管（2012年8月に終了）
9. 第5期理事へ引き継ぎ
10. 第5期理事・代議員組織図作成
11. 第5期理事・代議員名簿作成
12. 第5期理事会・代議員会司会、書記担当表作成

<学生支援・将来計画>

1. 同窓会オリジナルグッズの販売
ホームページで同窓会グッズの紹介予定
第8回東京女子医大看護学会学術集会、本院看護研究発表会、その他随時販売
2. 臨床看護師への研究助成
募集要綱の提示：ホームページと会報

<総会>

1. 平成24年度 第12回看護系同窓会総会の開催

<会報・ホームページ>

1. 看護系同窓会報第12号の発行
2. 看護系同窓会ホームページの更新・運営

<会計>

1. 年間の予算化・収支決算、報告

上記計画について、山元由美子副会長から報告された。また、会則第10条の役員の解任に関し、3) 代議員は、代議員会に2年間出席していない場合も適用になる旨が加わることが審議され、過半数以上の賛成挙手にて承認された。

(4) 平成24年度予算案

古藤小枝子会計担当理事から報告があり、過半数以上の挙手にて承認された。以上すべての議案がとどこおりなく審議され賛成多数で承認された。

次回 第13回総会予定日：2013年6月8日（土）



看護学部の音楽部生



懇親会の様子

看護師のメンタルヘルス支援 －リエゾンナースの取り組み－

東京女子医科大学病院 看護部
精神看護専門看護師
山内 典子



はじめに

看護師が生き生きと意欲をもって看護の仕事に取り組むことができるように、一人ひとりのメンタルヘルスの向上を支援することは、リエゾンナースの重要な役割のひとつです。このたび、総会時の講演において、リエゾンナースとして東京女子医科大学病院における看護師のメンタルヘルス支援に向けて取り組んでいることについて、紹介させていただきました。

組織におけるリエゾンナースの位置づけ

東京女子医科大学病院では、本院、東医療センター、八千代医療センターにおいて、現在、5名のリエゾンナースが部署を分担して活動しています。そのうち2名は看護部に所属して看護部長の直属で、3名は看護学部の教員の立場でリエゾンナースを兼務しています。また、平成21年度に東京女子医科大学男女共同参画推進局が設立された際に「看護職キャリア開発支援センター」が開設され、看護学部と看護部の協働で、5つのプロジェクトをもって看護職の多様なキャリア支援を推進すべく就労環境や教育体制の整備が行われるようになりました。リエゾンナースの活動もこのひとつである「看護職職場適応支援プロジェクト」における「メンタルヘルス支援プラン」に位置づけられています。ここでは、看護部長がセンター長を担い、看護学部の教員と看護部のメンバーが協働して、より先駆的、創意的な看護師のキャリア開発に向けた取り組みを考案しています。

看護師のメンタルヘルス支援

講演では、まず米国国立職業安全健康研究所が提唱する職業性ストレスモデルに基づき、看護職のストレスとストレス反応を示しました。さらに、その間にある個人的要因、仕事外の原因について述べたうえで、それ以上に重要と思われる緩衝要因について述べました。緩衝要因とは、上司・同僚・家族・友人からの支援や適切なストレス対処方法のことを言います。こういった緩衝要因にはたらきかけることは、量的・質的負荷や対人関係の困難さなどストレスの増強要因を軽減するよりも、ほぼ3倍もの効果をもって、ストレス反応を生じにくくさせるという研究報告があります。“嫌なものを取り除く”ではなく、“強みとなるものを伸ばす”という考えはメンタルヘルス支援において非常に重要な視点だと思えます。

リエゾンナースというと、メンタルヘル스에不調をきたした看護師に対して、精神状態の査定を行い、ストレスをいかに減らすかの対処方法を検討したり、必要時受診につなげるはたらきを想像されるかもしれませんが、実際はそういった対応ばかりではありません。その人自

身が向き合えるタイミングと状況をみて、自分の力で乗り越える方向で背中を押すこと、職場環境の調整にはたらきかけることも多々あります。

この場合、リエゾンナース単独で行うことはなく、主体は相談者であり職場のチームであることを大切に、看護管理者とともに支援しています。相談者の支援と同じくらいに、相談者を支援する人々をサポートすることに重きをおいています。特に、職場の人間関係に困難を生じている場合、その看護師にとって、職場に自分の居場所がある、守られているという実感を得ることが一番の支えとなります。そのため、個人の精神状態、捉え方やコミュニケーションスタイルの改善のみならず、受け入れる周囲にもお互いが歩み寄るために相手をどう理解して変化していくのかを考える必要性が出てきます。これは個人やチームが成長していく契機になります。患者さんの死、患者さんからの暴力、医療事故など看護師にとっての様々な心的外傷体験についても、支援に対する考え方や姿勢は基本的に同じだと思っています。

リエゾンナースの活動の実際

メンタルヘルス支援に関する実際の活動として、相談者に対する個人面接、新人看護師に対する談話会、看護管理者と連携した職場の環境調整や介入、ストレスマネジメントに関する研修、個人やチームが被った心的外傷体験に対するディブリーフィング等を行っています。個人面接においては、昨年度、相談を受けた看護師の人は122名で、内訳は新人看護師が69名、それ以外の看護師が53名でした。初回連絡は、ほぼ半々の割合で、相談者自身、所属部署の看護管理者からでした。相談者の約6割が面接を重ねて、また職場環境の調整のもと継続しており、精神科の受診に至った場合も、ほとんどの看護師が休職後に復職して継続しています。

おわりに

これまでの取り組みは、病院の看護部や看護職キャリア開発支援センターの支持により、病院内においてリエゾンナースに対する相談の門戸が広く公認されていること、ポジションパワーを抜きにした直接的な相談窓口としての立場が保障されていることの上にあります。また、悩んだ時にいつでも相談できるリエゾンナースの仲間、客観的にスーパーバイズをくださる母校の恩師の存在も大きいです。このような環境と周囲のご支援に感謝し、これからは経験を積み、日々精進しながら活動していきたいと思えます。

同窓生の皆様には、このような話をさせていただく機会をいただき、感謝申し上げます。本同窓会のますますの発展を祈念しております。

巣立った校舎に迎えられて



看護専門学校 23 期生
河野 優子

昨年から約一年間、大学に教員として、お世話になりました。足を踏み入れることなどないと思っていた教室や実習室、以前は寮だった現研究室は、どこも懐かしく、学生時代の思い出が蘇ってきました。学習時間の変化はかなりきついものがありました。旧弥生記念講堂での入学式、白川セミナーハウスや尾瀬の合宿、修学旅行で訪れた最北端の地、稚内。新しい弥生記念講堂での卒業式など、思い出は尽きません。特に任期を終える頃に手伝いをさせていただいた卒業式では、卒業証書を授与される学生の姿を見て、数十年前の自分を重ね合わせ、同じようにあの場所にいた自分を見守ってくれた亡き母の気持ちに触れたようで、灌漑深いものがありました。今思うと、事ある毎に思い出を辿り、前の教育現場での経験から、沈んだ気持ちを立て直すことができず、折れそうになっていた心を、懐かしい校舎が温かく包んでくれるようで、心癒されたように思います。そして、残

りの人生を心穏やかに生きていく活力をいただいたようにも思います。

学部では主に実習指導を担当し、昔から考えることを大切にしていた伝統が受け継がれており、変わっていないことが嬉しく、誇らしくもありました。どちらかという考えるより行動が先という学生だった自分にとって、考えることが看護をより面白くすることに驚いた思い出があったからです。そんな学生時代は、終末期の看護に携わり、愛する人の死は悲しみだけを残し、家族に掛ける言葉を探す日々でした。卒業して、死が悲しみだけでなく、家族の生きる支えにもなるという移植医療との出会いによって看護の力の凄さを改めて実感する経験をさせていただきました。海外で移植コーディネーター研修を始めた頃、言葉の壁にぶつかり、看護の学びを実践したことで信頼を得ることができ、日本ではできない脳死臓器提供について多くの体験をさせていただきました。帰国して移植コーディネーターの職に就いた時も、全国を少人数で対応するシステムの中、看護という拠り所があったからこそ、心細く不安を抱えながらもひとりで活動することができたと思っています。将来、これまで支えられた看護の力をたくさんの人に伝えることができたなら嬉しく思います。大震災で一年弱の任期でしたが、懐かしい校舎に迎えられて、忘れられない一年になりました。ありがとうございました。



第二看護専門学校 9 期生
吉川 孝子

早いもので、東京女子医科大学附属第二看護専門学校を卒業し、30 数年が過ぎようとしています。どんなに時が過ぎても学校とは縁が切れず、今でも毎年、かわいい後輩のために看護学校に講義にでかけています。そして、毎年夏には、当時担任教員だった金井つね先生を囲み同級会を行っています。懐かしい顔ぶれは、みな年をとったもの(?) 陽気で明るく、生き生きと生活しています。主婦業に専念する者、第一線の現場で頑張っている者、産業看護師として活躍する者、看護師長や主任として部下を抱えて迷いながら病棟を切り盛りしている者。私も今ではクレヨンしんちゃんの町(春日部市立病院)で副看護部長として毎日頑張っています。春日部市立病院では、主に、新病院建設のための準備や看護師育成のための院内教育を担当しています。特に院内教育では、新人教育や新人を育てる指導者の育成に力を注いでいます。そして、この事に関しては、看護学部の山元由美子教授の影響を多く受けていると感じています。山元由美子教授は、以前東京女子医科大学第二病院(現 東京女子医科大学東医療センター)に看護師長として赴任

し、その後、教育担当副看護部長として従事されました。当時は山元師長の下で勤務し、看護師としての貴重な考え方を教えていただきました。さらに教育委員として様々な看護教育の方法論を教えていただきました。当時、看護研究研修や教育担当者研修を任せられ、試行錯誤しながら真夜中まで残業し資料作りをしたのを今でも覚えています。そして、この積み重なりと努力の成果が現在の自分の源であると確信しています。

話は変わりますが、先日、埼玉県看護協会において運営のための委員会が開催されました。そこで同席した委員は偶然にも、看護学校の先輩(一期生の佐藤さん、関さん)や短期大学の卒業生(横関さん)でした。お互いに「どこかでお会いしましたか?」の一言から始まり、自己紹介で同窓生だとわかるとすぐに意気投合し話がはずみました(むしろ話が逸れたのかもしれませんが)。ここでは、まるで同窓会のようなごんだ楽しい時間を過ごすことが出来ました。それぞれの先輩方は、看護部長や副看護部長、副所長など責任のある役職を通じて、看護学校で養った「至誠」と「愛」の精神を看護の現場に脈々と受け継ぎ広めています。このように、看護同窓会のメンバーは、東京女子医科大学病院からは離れたものの各々の場所で助け合い、活躍しています。さらに、これからの同窓生の「輪」は、「至誠」と「愛」の精神の下に先輩から後輩に受け継がれ、固い絆となって発展し続けると確信しています。ありがとうございました。

今私が取り組んでいること



看護短大 20 回生
落合 香代子 (旧姓鈴木)

私は、現在、養育困難家庭の支援をする NPO にて非常勤職員として勤務しています。また、地元地域において児童虐待防止活動、被災地支援に関わる活動、そして不妊体験当事者として不妊体験者の方を支援する活動を行っています。今回、同窓会誌に私の現在の活動についてご紹介させていただくという大変光栄な機会をいただきました。

地域活動については、看護師としての活動ではなく一市民としての活動になりますが、今回特に児童虐待防止活動を中心にご紹介させていただければ幸いです。きっかけは、地域で専業主婦をし始めた頃に昼間の公道で父親と思われる男性が3歳くらいの男の子に激しい暴力をふるい続ける場面に遭遇したことでした。状況を見てすぐに虐待だと判断しました。ですが、その場では親子に声をかけるのが精一杯で暴力を受けている子どもに対して何も出来ませんでした。その後、虐待を受けている子どもを取り巻く環境が必ずしも地域で整備されていな

い現実を知ることとなりました。この体験が私のその後の活動に大きな影響を与えました。当初は、誰か地域で弱い立場にいる子どもたちを助けてくれる人はいないのか、誰に相談したら良いのか、とその一心で動いていました。いつしか、「一人一人、問題意識を持った人が活動しなければ地域の課題は解決しない。」と思うにいたりました。今年度は、都内で虐待防止の活動を行っている団体や行政の方々とともに課題に取り組むまでに活動は広がってきました。

私のこうした活動は、学生時代と看護師時代の学びが基礎にあり、現在までつながっているのだと感じます。特に印象深いのは、科目履修生として夜間聴講で受けた、生命を取り扱うことについて向き合った「生命倫理」、お産にとどまらない社会の「性」にまつわる課題を取り上げた「母性看護」の授業です。「児童虐待」「子育て支援」「不妊」私の現在のテーマ選択だけでなく、患者として自分自身の問題に向き合う時にも助けになってくれました。

卒業後、看護師として充実した時間を過ごす時期もあれば、迷い多く過ごした時期もありましたが、それは今に通じていたのだ、あのとき迷ってよかったなど実感しています。今後も地域の課題に対し、看護師マインドを持った一市民として、真摯に、そしてつい忘れがちですが「活動は楽しく！」続けていきたいと思っています。(E-mail: kayoko@goatbabe.com)



看護学部 3 回生
武部 恵子 (旧姓 大橋)

看護師になったときは10年先、自分がどういう看護師になっているか、そもそも看護師を続けているか、イメージをすることさえ出来ませんでした。しかし、時間が過ぎるのは早いもので、大学を卒業し、看護師として9年が経ちました。もう1年で看護師10周年を迎えるところまで。

この9年間、右も左も分からない新人から、新人をサポートするプリセプターになり、チーフになり、様々な立場を経験してきました。プリセプターでは、新人に関わる中、自分の理想通りにはいかないこと、苦難することが多く、挫折感を感じることもありました。チーフでは、ただ関わるのではなく、チーム全体をみて、メンバーのそれぞれの目標達成やステップアップできるように関わることの大変さを感じました。

このような経験を通して、看護職キャリア開発支援セ

ンターが主催するクリニカルコーチ研修に参加しました。クリニカルコーチとは、自部署の新人教育やスタッフのキャリア支援をする者と定義され、昨年研修を終え、今年より1期生として活動を始めました。初めてのクリニカルコーチであり、前例もなく、手探り状態でしたが、まず、研修の中で学んだ“コーチング：相手のことを大切に思い、相手に合わせて関わること”を病棟スタッフにも知ってもらいたい、活用してほしいと思い、体験学習を企画しました。また、新人、プリセプター、チーフ等それぞれの立場のスタッフに関わることを心がけ、師長や主任のアドバイスを受け、協働しながら新人指導を行ってきました。

クリニカルコーチとしてスタートしたばかりであり、自分自身も勉強し成長しながら、より良い病棟になるよう精進していきたいと思っています。ひとまず看護師10周年ではクリニカルコーチを充実させ、その次の10年どうなっていきたいかイメージしながら20周年を目指して頑張っていきたいです。



看護学研究科博士前期課程
(2003年度入学)
浅香 えみ子

看護学研究科博士前期課程を修了後、約6年が過ぎました。その間に様々な経験の機会を得、学び、そして現在は何に向かって取り組んでいるかをご報告させていただきます。

大学院を修了後に日本看護協会へ出向し、救急看護認定看護師の教育に携さりました。ここでの経験は、現在の関心課題である人材育成、成人教育について見識を広める機会となりました。教育を系統的に理解する経験はありませんでしたが、知るほどに興味が深まりました。そのころに、救急医療では当然のことと認識されていた急変時対応としての一次救命処置：BLS (basic life support) に、効果の限界と疑問を感じ、“急変予防が看護師の役割だ”と発案するきっかけがありました。このことに着目した国内の教育システムは全く存在せず、命の保証が経験則に負っていることに気が付き、経験的習得内容を教育システムに乗せるべきと考え、教材開発システムである Instructional System Design (ISD) を用いて急変予防の学習システムを開発する機会を得ました。

教育は教授者の教育観によって手段が変わるとさえ言われるものですが、“教えることが教育の結果ではなく、受講者が理解したか、実践できるようになったかが結果である”“受講者が目標に達しない原因の全ては教材にある”、さらに“メリルの第一原理である習得度はその人の習得に必要な時間を充足できた割合による”。すなわち、誰もが時間をかければ理解し習得できるという考え方に目から鱗が落ちました。この考えに感化されながら一つの教材を作り上げ、教材開発と伴に教授技法、学習環境にも関心が広がる中、日本看護協会から臨床に戻り、そして看護部の教育を担当する管理者となりました。

時期を同じくして、医療者教育をシステムで改善しようとする学会（日本医療教授システム学会）の創設に関わり、看護のみならず、医療者の学び、成人の学び方を扱う機会を得ました。教育から学習という概念にシフトし、看護管理者の立場で得た経験も加味され、人の学びに関心を持つようになりました。人の学びに関心を寄せつつ感じることは、看護は対象者の内的変容を期待し、その人の健康を自らが創造するに関わります。まさに人の学びと同じであるということです。人と人との関わりには相互認知の関係があります。この部分への関わりを看護師として、人の学びを支える学習支援者として試行錯誤中です。臨床と研究とで悪戦苦闘しつつ40歳代半ば、関心事の探求中です。



看護学研究科博士後期課程
(2008年度入学)
原沢 のぞみ

看護学部で1回生として卒業し、早いもので丸10年が経ちました。今は懐かしい脳神経センターに入職した当初、日々の業務に追われ、学んできた看護と臨床での看護の違いに戸惑いながら、石の上にも3年と自分に言い聞かせて頑張りました。そして、もう一度看護を学びたいという思いから、4年目で看護学研究科博士前期課程に入学しました。今思えば仕事も続けながらの2年間は大変でしたが、学んだことをすぐに臨床場面と結びつけることができる充実したときでした。そして、一息ついてから、進学を考えようと思っていたところ、M先生からの「その次の年になったとして落ち着くとは限らない」という言葉に背中を押され、2足の草鞋生活を継続しました。さらに、博士後期課程では、仕事に加え、妊娠、出産、育児といった「母親」という経験も積むことにな

りました。この状況での職場復帰には、不安もありましたが、看護部をはじめとする職場と家族の協力を支えに、3足の草鞋生活を続けることができました。子どもを背負って夜中にパソコンに向かい、時間はかかりましたが、博士号を取得しました。何度もくじけそうになる中、指導してくださる先生方、職場の方々、大学院の仲間、家族、2人の娘達の成長や笑顔、患者さんからの励まし等々、多くの支援を力に頑張ることができました。

私は持久走や登山のようにこつこつと取り組むことは苦手な分野ですが、この10年は長い道のりを時には立ち止まりつつ、前に進んできたように思います。何かを継続していく中に、ひとつずつ積み上げ、達成していくことに充実感があると思います。学び舎に教員として戻ってきた今、今後も少しずつ前進し続けながら、自己の経験や学びを深めつつ、より良い医療、看護における教育、そして、臨床のために貢献していけるよう日々精進して参りたいと思います。

東京女子医科大学病院の看護の歴史（昭和40年前後） －重点配置病棟の設置の目的と成果－

昭和39年に東京女子医科大学付属高等看護専門学校が開校し昭和43年4月に1期生の卒業を期し、東京女子医大病院では、看護の質の向上を図るために看護部と看護学校で計画された重点配置病棟の看護について紹介します。重点配置は、旧南病棟と旧東病棟、3号館（現在の中央病棟の一部）、2号館3階、1号館5階病棟の各病棟へ卒業生数名が配置された。翌昭和44年度卒業の2期生の重点病棟は、心研6階、消化器4階、1号館4階、2号館4階に拡大されたが、その後種々の理由により2年間で中断された。しかしこの重点配置をしたことが女子医大病院の看護の質の向上の揮発剤となった。基礎教育と臨床のユニフィケーションが日本で初めて開始されたことになる。それが、発展して昭和47年と教育病棟になった。これについては次回紹介します。

重点配置計画の要旨は、本学病院の看護業務の改善についてはすでに様々な努力が積み重ねられているが、看護要員の効率的な活用と各要員の能力に応じた自己実現のできる職場環境について検討することが非常に重要になった。この点について特に看護管理の立場からの方策をもつべきだと考えた。今回看護学校の卒業生が卒業するにあたりこの課題を特別の計画により実践することを運営会議で決定した。期待されることは、看護部は①現状における看護問題の解決、②患者ケアのデモンストレーション、③看護内容の改善、④看護管理体制の検討、⑤職員教育、看護学校は①教育の評価、②患者ケアの研究、③実習環境の改善、④実習指導の研究、⑤教員構成とその活用の研究、⑥学生の学習意欲の向上であった（東京女子医科大学附属看護専門学校史より）。

今回は、1期生の小西弘子（旧姓新井）さんと2期生の林佐多子さんと堀八重子（旧姓東平）さんにインタビューしました。8月の猛暑の中、ご協力いただき感謝申し上げます。先輩方の生き生きとしたお話を伺い、看護の礎を創っていただいたのだと敬服致しました。インタビューと構成は同窓会誌委員の山元が担当致しました。

以下はその要旨です。

1. 昭和40年前後の東京女子医科大学病院の看護の現状

昭和33年から看護制度は完全看護から基準看護に移行したが、当時、女子医大病院は准看護婦が大多数であり、看護婦が少なかったため、基準看護を導入できない状況にあった。このような状態を改善すべく、まずは現在働いている准看護婦を看護婦にし、看護の質

を向上させる対策として東大の衛生看護科の湯楨ます准教授、厚生省からはアメリカ留学から帰国したばかりの小林富美枝先生を招いて看護改革に取り組んだ。

1期生が就職した昭和30年の末に心臓血圧研究所（以後心研）が設置されて初期の段階では、患者に付き添いがついていた。看護のできる看護婦を育成しようとしたので、1期生は希望を持って学校に入学した。40年代は病院の設備が皆無の時代で、自分たちで酸素ポンペを病室まで運んでいた。7台程の酸素テントに全部自分たちでセッティングをしていた。



酸素ポンペ

また、滅菌消毒した器具や機械などは無かったので、滅菌消毒するのに全ての器具を新聞紙に包んで中央材料室に持って行った。1週間に1回滅菌消毒すればいいようなものだった。例えば注射器はガラス製品でシンメルブッシュにより煮沸消毒し、繰り返し使用していた。そのような中でも病棟では、看護は患者の側にいなければいけないと思っていたが、現実、医師の指示を受けてその処置を行うことで精一杯であった。昭和40年前後の病院は殆ど准看護婦で、看護婦の資格の人は病棟で2人位であった。婦長達で看護婦の教育を受け持っていた。1期生は婦長や看護婦に冷たい目で見られていた。今更女子医大がどう変わるのかなど大変風当たりが強かった。

3号館は3階と4階が消化器の病棟。3階には消化器の他に整形外科が入っていた。消化器は見たことのないような手術をたくさんやっていた。夜勤の巡回は先輩の1期生が既に何人かいたので、2期生はケアが怖いというようには思わなかった。主任がしっかりした方で、手術室に行って手術の状況を詳細に聞き、病棟で患者の手術の状況を説明したので、私達は術後決められたことをやるような状況であった。他の同級生に聞いてみても、先輩の1期生がいたので、看護については恐ろしくなかったと言っていた。ただ、自分達が学校で学んだことを病棟で実践しようとしたときに疑問

がたくさん出てきたので質問すると、「まだ分からないわよ」と受け入れてもらえないような状況だった。在学中は、この病棟だけではなく整形外科や内科などにも行った。救急外来のアルバイトの山崎さんは手際が良くてびっくりした。それが入学した頃の思い出だ。まだその頃は殆ど専門性などなくて、医師の介助が主な看護の仕事であった。また、学校の教員がベッドサイドケアを行っているとき患者から「今日は病院の大掃除ですか」と言われたこともあった。

2. 小林富美枝先生の教え

1) 先を見通した看護

小林先生は湯楯先生に女子医大の看護を変えて欲しいと頼まれ、看護学生を育てようとして女子医大にいらした。1期生が今でも皆が口々に言うのは、今までの看護教育を白紙に戻して小林先生の新しい考えの教育を受けたことである。小林先生のお蔭で現在があるのだと、クラス会では毎回話題となっている。

小林先生は昭和40年代に20年後には高齢化社会になると言われ、精神科、保健所、身体障害者施設、訪問看護ステーションなど色々な地域の施設の見学や実習を実施した。人間としての根源や価値感のようなものを教えてくださり、みな小林先生の教えを肌で感じていた。

小林先生は病棟に毎日のごとく熱心に訪問していたので、短時間でも患者さんのことで相談ができていた。また、小林先生は考えることの教育をされたので、病棟で色々な試みができた。私は、72歳でまだ現役でいますけど、今も絶えず思い出すのは小林先生の言葉である。小児循環器で看護していたときに、子どもが私の顔を見ると、採血とか痛いことをされるだけなのに速くから駆けて来る。言葉ではない何か感じるものがあるのかなと思った。小林先生からは相手を察する気持ちを教えていただいたのだと思う。現在でも仕事をしているのは小林先生のお蔭だと思っている。子どもでも老人でも、表面には出していないけど、その人なりに多くを背負っているのだろうと思うので、一人ひとりの患者へ対応した声のかけができるのは小林先生のお蔭だと思う。

2) 小林先生の教育に対する意気込みと看護の独自性

小林先生の教えは、「あなた達は看護を白紙に戻して学び直しなさい」ということを何回も言われた。女子医大の看護は10年も20年も遅れているといわれ、小林先生の意気込みを第一に感じた。

私達には今まで何がよい看護なのかの見本がなかった。絶えずこれで良いのかと思いつけていた。昭和40年代に湯楯先生が、これからはロボットが血圧を測ったり体を動かしたりするような時代が来るけど、看護はただ表面的なことだけではないことを説いてくださったことが印象深い。私は入学して最初に小林先生に言われた看護の独自性ということが、初めは分からなかった。看

護婦は、医者の指示を受けて仕事をしていたり、診察の補助をしていたりするだけでなく看護婦には看護婦の仕事があるということをお林先生に教えて頂いた。卒業生が全国に散らばっているお林先生の教え子は、先生のめざした看護の独自性を実現していると思う。一番良かったのは、2年目には在校生がいたこと、一人ではなくて同じ見方をしている人がいることがとても力強かった。後輩の私達も1年先輩がいるということが力強かった。

3) 考えながら生涯学び続けなさい、そして

学ぶことはいつでも可能

1期生の頃のお林先生は、編入生でも、年齢がばらばらでも、入学を希望する人は拒まずだったので、いろいろな年代の希望者が全国から応募して来た。だから結婚している人もいた。これは、ユニークなアメリカ流の考えであった。

お林先生は漢字が分からなかったら小学校の頃の辞書を出して勉強しなさいと言われた。私はそれを最もだと思い、今ようやく自分が出来なかった勉強をやりだして周りの人がびっくりしている。このように原点に戻って勉強しなさいとのお林先生の教えは今でも生きている。私達はお林先生からいつも「勉強しなさい。これからは大学に行くのは基礎です」と言われて、大学入学を目指していたので私達は先生の言う通りに動いてみようと考えた。友人に触発されて今まで勉強してきたし、退職後も色々なことを勉強した。いつも思ってきたのは、年齢は関係なく常々第一歩から始めようということでも実行している。よく皆は「歳だから。」というけれども、いつも学ぶ時に自然に学べるのはやはりお林先生の教育のお蔭と思う。

また、お林先生からすごく怒られて泣いた経験があった。お林先生から1枚の文献を渡されて、いつまでに読んで来なさいと言われて、どうしていいか分からないのでコピーをして皆に配った。そうしたら、お林先生は、「本当に勉強する気があったのだったら、皆で勉強するなどやり方があったはずだ。コピーして何の苦労もなく貰った人は勉強しない。あなたは皆が勉強をする意欲をそいだ」と、怒られ泣きながら部屋を出たら、薄井坦子先生が「お林先生の言ったことが、今は分からないかもしれないけど、きっと分かる時が来ると思います」とおっしゃった。本当に厳しい方でした。でも、一つ一つのことを思い返すと、お林先生は表面的な教育ではなく人間として育てる本当に素晴らしい先生であった。個別に応じてこのように教育すると、患者がこのように変化をしていくというような教育でした。一生涯出来る看護婦を育てたいという高い考えを持ってらっしゃる方でした。

お林先生が女子医大にいらした目的の一つは、短大、大学、大学院まで学校を創ることであったので、それも現在は達成した。その内容についてはよく分からないが、今、お林先生が描いていたものをちゃんと受け継いでい

る現状を大変嬉しく思う。



入学式の茶話会。小林先生方を囲んで

3. 重点配置の現状

1) 重点配置のオリエンテーションと学びの実践

オリエンテーションはあったのかもしれないけど、記憶にあるのは、小林先生が「一人では力が発揮出来ないから、何人かで行きなさい。」と言って力を入れていたことである。配転希望はある程度の聞いてくれた。1期生はいろいろな部署に配転された記憶がある。重点配置病棟は旧東病棟と1号館5階と3号館であった。卒業時には精神科、消化器のリハビリもあった。小林先生の教育を受けた1期生は自分たちがやっていかなければという意気込みがあったので、現場の主任・婦長達は自然と後ずさりのような雰囲気になってしまったと思う。2期生の場合は、卒業して重点配置になったら私達にお任せという形であった。管理的な仕事まで全て私達がやるようになった。それは教育的な意味なのか、やってちょうだいという意味なのかはよく分からないけれども割とやり易かった。それは1期生が作ったものだと思う。自分達が学んだことを少しでも理解して現場に生かして欲しいということだと思う。私たちの重点配置病棟には小林先生や在校生がいたので、本当に心強かった。また、看護に関する自分達の意見を通せた。ある時、Eさんは婦長に「あなた達は理想の看護をしていきたいと思っているけど、こんなに人員が少ないのに、そんなこと出来ないでしょう」と言われた。しかしEさんは、「理想だといわれても勉強してきたものはやっぱり現場で生かしていかないといけない」と言った。そして、小林先生のところへ行行って、「現場で人員が少ないので私達が学んだことが活かせません」と話したらその後、人員が増えたこともあった。このように小林先生は本当に学生の悩みを聞いてくださった。また、小林先生は風のように病棟に現れて、改善点を婦長に言われていた姿が今でも目に焼き付いている。小林先生は看護部長とも随所でやりあい激怒している場面を私は見たことがある。

2) よい看護をするための小林先生と病棟での

ディスカッション

小林先生はよく実践の場に来ていた。学生をあのくら

い大切にしている先生はいないと思った。1号館5階の病棟で勤務していたときに小林先生が、「患者さんの問題点は何かについてディスカッションしましょう」と言われたこともあった。小林先生は1期生にはものすごい力を入れていた。同時に、小林先生は教務の先生方にも力を入れてくださり、先生方も看護を同じ目線で見られるようにしていたことである。小林先生は本当に教師の鏡だと高橋先生、貝塚先生も尊敬していた。先生方も今までの教育とは違う教育だと思っていた。その後、私達は看護に関しても知識が増え、患者の個性に応じた看護をするのだと一致団結して言えるようになると、だんだんと医師の見方もこれまでとは変化した。一方的な言い方であってもそこに変化がみられた。

3) 基礎教育と臨床のユニフィケーションの萌芽と卒業生の力量

2期生は同級生が5人いたので、朝の洗面、夕の洗面やお茶もあげましょう、ベッドチェンジや体位変換や清拭もしましょうなど、どんどんケアを導入していった。それまでは日常生活援助に関するケアはしなかった。看護記録のこともメチャクチャであった。カーデックスがやっとできた。高橋先生も随分苦労なさって実現したようだ。看護部に看護改善の委員会ができ、婦長達も随分変わってきたと思う。それは、教務の先生が現場に顔を出してくれたことが良かったのだと思う。再就職した昭和40年の頃、学校を作るためにいらした藤枝先生が3号館に勤務なさったときには、現場で細かく指導いただいた。

実習病棟の1号館と3号館は実習担当の先生が、「患者さんのベッドサイドに行つて立ったまま話をすると患者さんがすぐ帰っちゃうと思うから、出来るだけ座って話をさせてあげて。」と言っていたことを覚えている。卒業した当時は2号館の4階だったけれども、教務の先生は殆ど見かけなくなり、少し経ってから、河合先生が実習でいらしたので病棟に学生さんが来てくれるといいなと思った。卒業しても先生方と繋がっていたかったのですけれども、それができなくて不満があった。卒業して「あなたはリーダーです」と言われると恐いと感じることもあった。

1号館5階は重点配置病棟だったから、力を入れていましたよね。内科系8科が入っていて、すごく忙しくて一日中かけずり回っていた。その後、昭和47年頃から教育病棟ができ、小林先生が言われていた良い病棟がこれからつくられたのだと期待していた。教育病棟が創設されようやく少しはリーダーシップが取れるようになったのではないかな。

4. 重点病棟の成果

1) 個別的な看護の実践

重点配置病棟の心臓血圧研究所は当初3号館にあり、

榊原先生を頼って全国から患者が集まり、看護婦も負けていられないとのプライドをすごく感じていた。患者に対して、誇りを持って看護しなくてはいけないという責任感がすごく強かった。卒業生の配置転換により心臓血管研究所の回復室はがらりと変わった。

重点配置病棟では学んだ看護を実践する試みをしたと思う。今まで考えられなかったことも考えられるようになった。私達が入学したころは、病院の最低基準のことしかやらなかった。卒業後は、自宅では食事の合間にはお茶も飲むからお茶を出す、普通なら毎日お風呂に入れるのに入院すると入れないから頻りに身体を拭く、検温や洗面も朝晩実践した。整形外科の患者のバジャマのズボンの改良も病院でやった。とっさの判断もできるようになった。例えば喘息の患者でずっと入院していてもお風呂に入りたいと言っていた人がいた。私が夜遅くにお風呂に入れてあげましょうかと言うと、「本当かね。」と言った。患者は重症なので大きな洗面器で寝たまま足浴をさせてあげた。すると、「お風呂に入れてくれてありがとう。」と涙を浮かべて喜んだ。残念ながらその翌日に亡くなったが、その患者に、今、何が必要なかを判断できたと思う。それまでの看護ではそのようなことをしたら怒られていた。

2) 看護の工夫

心研6階の小児病棟は重点配置で2期生が5人配置された。Sさんの話では、配転後の心臓血管研究所全員の雰囲気が変わって、やり易くなり自分達が学んだ看護技術を生かしてやる気十分にやれたのに、一年でバラバラにされてしまった。Sさんは9年間心臓血管研究所に居たけれども、あとの人は配転させられて結局心臓血管研究所5階で頑張っただけの看護管理のやり方で管理した。その後、教育病棟が創設され山崎慶子先生の厳しい指導を受けたことをきっかけに、看護の質が随分変わった。自分自身の気持ちが弱かったので同級生と一緒に重点配置は随分力になった。まだまだリーダーシップを取れる力がなかったのに、同級生達と一緒に見守ってくれたこと、1期生が地盤を築いたことが強い力となっていた。

過日Fさんと話した折、彼女は消化器の重点配置病棟に配置され、最終的には消化器の回復室に配転になった。その当時の婦長は厳しかったけれど、患者のことを第一に考えての指導であった。患者のために先輩と自分達で考えて、術後の患者が自分で起きられるようにベッドにつけ革をつけてつかまるようにしたことや低圧持続吸引器のドレナージの方法も医師達と一緒に考えて改善した。大変だったけれども楽しかった。今は別の病院に勤めているけど、その時考えたことを今も活用していることを誇りに思っている。また、重点配置病棟で1期生と2期生と一緒に考えたことが今も生きている。以前、どこかの看護学会でベッドのことを発表した人達がいたので、女子医大で自分達が考案したベッドの文献を提示し

たら、皆が驚いていた。女子医大で学んだことを今も誇りに思っていると懐かしがっていた。

3) 看護婦としての成長

昭和49年から榊原先生が循環器や糖尿病をメインに三井ビルクリニックを開設し勤務した。そのクリニックに勤務していたある時に小林先生が受診に見えた。小林先生は卒業生のいるところに受診されほっとされているのかと思った。その時、小林先生は蒔いた種が芽を出しその様子を見にいらした気がした。小林先生は、ご自分で教育されたことの評価をされていないけれども、1期生は全国に散らばっても小林先生の蒔かれた芽を自分なりに育てながら看護していたと感じている。

2期生のときは、職員の大多数は看護学生であったので、卒業したての人はリーダーシップも十分に育っていない、技術的にも卒後1年～2年の経験だから自分の技術でやっていくのがやっとだったと思う。重点配置病棟がなければ、そこから教育病棟へと発展していかなかったと思う。



左からインタビューに答えてくださった1期生小西さん、2期生堀さん、林さん

2年間で重点配置病棟が閉鎖になった理由は、重点配置の病棟は看護師の人数が多かったため、重点配置を受けられなかった病棟の婦長達からは人数が足りないので不平等だと言われ反対があったので中止せざるを得なかった。

後日談、このインタビューの後お世話になった落合清子先生のご自宅を山元が訪問し伺った話では、女子医大病院は看護記録やカードックスもなかったため、教員たちが聖路加病院に見学に行き取り入れたとのことである。

小林先生は学生によいものを見せることが必要である。それとともに劣悪な状態をも見せなくてはならない。それを批判できる力を持たなければならないと言われた。小林先生の教員に対する考えは、学生や実習病棟の看護師に看護のデモンストレーションを示すように言われ、教員も三交代しながら実践していた。教員は実践の中から問題点を小林先生に提案し、小林先生はそれを看護部に提案し、その解決に向けて小林先生は病棟に足を運び教員が仕事をしやすいような環境作りをされていたとのことでした。

廣澤克江先生、藤枝知子先生、河合千恵子先生を偲んで

看護専門学校・看護短大・看護学部で教鞭や看護部長としてご活躍されました3名の先生がご逝去されました。3名の先生は看護学の教育だけではなく、教育病棟の担当教員や看護部長としても女子医大病院の看護の質向上のために尽力されました。3名の先生方のご略歴のご紹介とお世話になった方々に思い出を寄贈させていただきました。

廣澤克江先生 ご略歴

大正 15 年 7 月 1 日 生まれ
昭和 22 年 3 月 31 日 聖路加女子専門学校本科卒業
昭和 22 年 4 月 1 日 聖バルナバ助産婦学院教務主任
昭和 36 年 4 月 1 日 厚生省医務局看護課看護係長
昭和 38 年 4 月 1 日 ” 助産婦係長
この間に 国立公衆衛生院看護教員養成課程専攻科教員
昭和 45 年 4 月 1 日 東京女子医科大学短期大学母性看護学助教授
” 母性看護学教授
平成 4 年 3 月 31 日 ” 退職
平成 22 年 5 月 2 日 ご逝去

藤枝知子先生 ご略歴

昭和 7 年 5 月 6 日 生まれ
昭和 29 年 3 月 31 日 聖路加女子専門学校卒業
昭和 30 年 3 月 31 日 東京都立保健婦養成所卒業
昭和 30 年 4 月 1 日 聖路加看護短期大学教員
昭和 40 年 4 月 1 日 東京女子医科大学附属高等看護学校
昭和 44 年 4 月 1 日 東京女子医科大学看護短期大学助教授
平成 47 年 4 月 1 日 ” 教授
昭和 59 年 4 月 1 日 東京女子医科大学病院看護部長兼任
平成 10 年 4 月 1 日 東京女子医科大学看護学部学部長
平成 14 年 3 月 31 日 ” 退職
平成 14 年 4 月 1 日 東京女子医科大学名誉教授
平成 23 年 8 月 24 日 ご逝去

河合千恵子先生 ご略歴

昭和 8 年 9 月 30 日 生まれ
昭和 30 年 3 月 31 日 東京都通信病院附属高等看護学院卒業
昭和 30 年 4 月 1 日 東京通信病院 看護師
昭和 43 年 3 月 1 日 東京女子医科大学附属高等看護専門学校専任教員
昭和 44 年 3 月 31 日 国立公衆衛生専攻課程看護学科終了
昭和 44 年 4 月 1 日 東京女子医科大学看護短期大学講師
昭和 49 年 4 月 1 日 ” 助教授
昭和 55 年 4 月 1 日 ” 教授
平成 6 年 4 月 1 日 久留米大学医学部看護学科教授
この間に 久留米大学医学研究科博士(乙)課程修了
平成 16 年 3 月 31 日 久留米大学医学部看護学科退職
平成 16 年 4 月 1 日 久留米大学名誉教授(平成 23 年 10 月 2 日まで)
平成 23 年 10 月 3 日 ご逝去

「廣澤先生の暖かい手」

看護学部母性看護学教員（看護短大9回生）竹内道子

廣澤先生には学生時代から大変お世話になりました。

看護短大時代に母性看護学を学び、実習でその楽しさをあじわい、そして母性看護学の楽しさ・すばらしさをもっと学びたくて看護短大専攻科で助産学を学びました。決して成績の良い学生ではなかったのですが、いつも優しい先生のお顔を拝見するたびに励まされて、学業を続けていくことができました。

専攻科を修了後は、しばらく臨床で仕事を続けて参りましたが、平成元年にご縁がありまして、東京女子医科大学看護短期大学で母性看護学講座に在籍させていただき、廣澤先生と再会することができました。廣澤先生は退職された後も母性看護学教員の会合がある時にはご一緒に参加していただき、いつも優しいお顔を見せてくださいました。廣澤先生はいつも優しい笑顔で私達を受け止めていただき、母性看護学講座の母のような存在でした。

毎年お年賀状でご挨拶をさせていただいており、今年も廣澤先生のお年賀状を頂いていましたが、4月頃に突然御闘病のお話を伺い、訪床させて頂きました。きっとお身体も辛かったことと思いますが、病床でもいつも「にっこり」とお優しいお顔を見せてくださいました。4月の末に最後にお伺いした時に、看護短大の入学案内に載っていた白衣姿の廣澤先生と学生であった私たちの写真を少し大きくしてお持ちいたしました。するとその写真を見て本当に「にっこり」とお優しい笑顔を見せてくださいました。そして、「また来ますね」と声をかけると、廣澤先生の掛け布団が少しもぞもぞと動いたと思ったら、ベッド柵の間から左手をそっと出されていらっしゃいました。思わず私も手を出して握手をさせていただきました。そのときの暖かい柔らかな手が私にとっての最後の廣澤先生の手でした。本当に、一生懸命に差し出してくださった手は、廣澤先生のお気持ちが伝わってくるような暖かい手でした。

廣澤先生、今まで本当に有難うございました。

平成 23 年 看護学部の教員・大学院生のための廣澤克江国際基金を設立されました。

平成 24 年 東日本地震の被災者の学生のためのゆめ基金の設立をされました。



短大の学生とカンファレンスの場面

藤枝先生から学んだこと—古くして新しい看護—

看護学部小児看護学教員（看護短大13回生）奥野順子（旧姓北沢）

◆その1. 恩師として

看護短大の学生の頃、藤枝先生のことを「キャップ」と呼んでいた。藤枝先生は当時、やたらと大きいナースキャップを被られていたことや小児看護学の教員の長であったことから付いたあだ名である（多分）。

今も大事にしている短大時代の「小児看護学」のノートには、当時、小児看護学の講義は45コマあり、短大2年生の後期から3年生の前期にわたっていた。初回の講義ノートの日付は9月30日（昭和57年）、内容は【小児看護の対象と発達段階の特徴、成長・発達】で、教授の藤枝先生が担当されていた。成長・発達の一般的原理、原則には①順序がある、②連続的である、③決定的な時期がある、と記されていた。現在、看護学部の学生に教えていることと全く同じ内容である。3回目の【機能的発達-水分/電解質】の講義では、ノートの欄外に堂々と「全々おもしろくない！」と書かれていた（しかも誤字…ノートの角に落書きをする趣味があった私。なんと不謹慎な学生だったことか…）。21回目の【病児の看護の一般論】の講義では、看護として成長・発達を促すこと、そのためには不安の緩和に努める、プラスの体験にする、体験を広くする、とあった。また、健康状態を悪化させず維持・向上すること、そこで観察は大事であり、「痛いところは絶対に動かさない」や、環境への適応として、変化を最少に「(物品、衣・服装、母親)」、ともあった。これらは今も変わらない考えである。残念なことに私は30年以上も昔となってしまったこれらの講義内容は覚えていないのである。しかし、唯一、この病児の看護で取り上げられている「母子分離不安」については何故か妙に記憶に残っている。分離不安には抗議の段階、あきらめの段階、無関心の段階があり、無関心の段階は適応ではない、というところである。短大3年になって行われた29回目は【小児看護事例-脱水】で、例のごとくノートの欄外には「pf.cap」(キャップ教授)と落書きがあった。私が現在もある水分/電解質や脱水の病態生理の理解困難感、当時の不真面目な学習態度が影響していたことを確信した。

◆その2. 上司として

私が女子医大病院の小児科病棟に就職した昭和59年と同じ年、藤枝先生は女子医大病院の看護部長を兼任され、今度は職場の上司となった。当時、一病棟の看護師が看護部長にお会いすることはまずなく、私が病棟の看護師時代に直接お会いしたのは、退職の挨拶に行った時くらいであったように記憶している。

その後、私が小児看護学の教員として母校に戻って来た時も、藤枝先生は小児看護学の教授であり、看護部長の兼務も続けられていた。そのため、一緒に仕事をしたという実感は残念ながらほとんどない。しかし、藤枝先生が編者で、一部を執筆されテキストとして用いていた『看護学双書小児看護』（文光堂、1987）は新米教員の私にとってはバイブルであり、ここから多くのことを学んだ。その中の小児看護の理念の冒頭には、「小児は一個の人間として尊重され、看護も当然この理念のもとに行われているものであり、1人1人の小児が健康の状態に応じた、または健康の状態の維持向上のために、その児なりの生活が送れるように援助していくという立場をとっている」とあり、これは25年前とは思えない、現在と全く同じ理念である。さらに、小児看護の特徴として①成長発達への援助が必要である、②保護者を活用する必要がある、③家庭、病院、家庭と小児にとって生活が連続的であるようにする必要がある、④いかなる児にも遊びを考慮する必要がある、⑤常に安全への配慮が必要である。これもしかりで、実習指導の場面では今もたびたび学生に伝えている内容である。このテキストの排泄への援助の項には、生後8か月くらいからおまるに腰かけさせてみて、1歳くらいからおむつを外してみるようになどある当時の記述をみても、藤枝先生の小児看護の基本的な考えについて、その新しさを再認識することができよう。

藤枝先生は女子医大を退職される際、看護学部ニューサーカとれあーに、次のように寄せている。「(前略)皆様、すでによくご存じの通り、『よい看護あつてのよい医療』といわれて参りましたが、私は微力ながら、この『よい看護』とはどのような看護をいうのであろうかと常に考えて参りました。一つの言い方として、それは、患者様の立場をよく理解し、さらに患者様やご家族の方のお気持ちも大切に受け止めていこうとする「心」をもって看護するということでした。(中略)やはり最も肝心なのは、看護実践そのもの、そして、それは看護する人の心ではないかと考えています。これは私達の先輩が看護実践を通して語り継がれてきたことで、古くして新しい看護する心そのものではないかと、改めて確信しております。(後略)」(東京女子医科大学看護学部ニュース第11号p2)そしてその藤枝先生から私が学んだことは、まさに「古くして新しい看護」だったのである。先生、本当にありがとうございました。



藤枝先生を囲んで

河合先生との思い出

東京女子医科大学八千代医療センター看護局長（看護短期大学3回生） 松平 信子

東京女子医科大学看護短期大学の3回生として、河合先生と出会ってから40年。先生が1994年6月に東京女子医科大学を辞められ九州の地へ職場を替えられるまでの20年間を改めて振り返ってみると、本当にお世話になってここまで来たことの感謝でいっぱいです。

1974年の私が卒業し就職した頃の女子医大病院は卒業生を育てて看護の質を高めようという教職員の期待で満ち溢れていました。学校と看護部が一体となり教育病棟が始まった頃でした。

卒業生に対して学校の先生達全員が愛情一杯に卒業生を見守ってください、仕事が終わるとリーダーシップ教育が学校の校舎で始まり毎晩のよう通ったものでした。院内教育も試行錯誤で創られている中で、私は卒後3年目頃から教育委員会の仲間入りをし、教育企画は当事学校の会議室で教員と看護部職員と一緒に検討していました。意見も活発で、教員同士の意見がぶつかりで中々まとまらず、大変なところに参加してしまったことを思い出します。其の会議の中心にいつも河合先生がいて、色々新たな視点での意見や問題提起をされていました。先生は、本当に看護を愛し楽しみ、人を育てることに情熱を燃やされていました。

個人的にお世話になったことは、なぜか私が仕事のことで疲れていると研修のパンフレットを持って、「この研修行ってみない？」と現れるのです。先生は好奇心が強く、異業種の企画する研修に行ってきたは、其の学んだことを院内研修に取り入れていました。今もリーダーシップ研修Ⅱ、Ⅲでお世話になっている星野先生も河合先生のつながりです。1980年ごろ「人間中心の教育を現実化する会」が企画したワークショップに行かない！と誘われ、富士宮で2泊3日の研修と一緒に参加。いろいろな職業の人が参加していました。そこでヨガの先生と知り合い、巴1寮でヨガの教室を開くことになりました。夕方になると週1回のヨガ教室と一緒に通ったものでした。ヨガの先生つながりで、インドに1週間の旅行にもご一緒し、仏跡めぐりもしました。この集まりの中でも先生はいつも中心にいて人生を楽しむことを後ろ姿で教えて頂きました。

2012年10月3日河合先生は天国に召されました。私が先生の体調不良を聞いてから4ヶ月後のことでした。2011年6月に東京で「癌の研究会」の関係で出てくるので食事会を企画する話があり、20年ぶりに5人で食事をご一緒したのが、先生とお話しが出来た最後となりました。その後最初で最後のメールをいただきました。「先日は思いがけず懐かしい方々とお会いでき大変楽しく至福の時間が持てました。幸せな気分になりました。松平さんはあの頃といいにしても20年30年前ですが少しも変わらないので驚きました。私もタイムスリップして当時に戻れました。大変なお仕事がんばっておいででしょうが愚痴一つ言わないのがあなたの良い所ですね。お仕事で九州にお出でになることもおありでしょうから1日余裕を持って久留米にお立ち寄りください。久留米は良い所です。それまでには腰を良くしておきます。お体に気をつけながらお仕事にお励みください。ではまた・・・」。これが先生の最後のメールでした。

河合先生は、福岡県香春町にある護徳弘法院にあるお墓に眠っていらっしゃいます。にぎやかなことが好きだった先生です。福岡に行かれたときは、是非時間を作って観光もかねていかれると喜ばれると思います。

合掌

護徳弘法院の磨崖仏

香春町五徳は古くは護徳と書いた。護徳弘法院の高さ10メートルほどの大岩に刻まれた磨崖仏は、鎌倉期以降江戸期以前の構造とされているが、正確な年代は不明。

山の斜面にある大きな岩を下から見上げると、上部に釈迦と不動明王を意味する梵字が刻まれ、その下に3体の仏像が浮き彫りにされている。香春は万葉の時代からの歴史の古い地である。

(インターネットより検索)



2011年6月に河合先生と



東京女子医科大学看護学部（河田キャンパス）実行委員長 梅澤 恵美

10月下旬に第51回女子医祭が行われました。東日本大震災があり多くの悲しみがあるなか希望をもちその悲しみを忘れずにいようという願いを込めて「希望」というテーマで開催されました。部活ごとの模擬店・公演で賑わう様子の中、看護学部からは、音楽部が発表会を行い、ご来場の皆さんを歌で癒しました。そして、学部生によるアロママッサージでも癒しを提供しました。女子医大祭を終え医学部と看護学部の学生が協力して成し遂げられたことに大きな喜びを感じました。最後に第51回女子医祭にご尽力いただきました先生方、事務の皆さまに深く御礼を申し上げます。

東京女子医科大学看護学部（大東キャンパス）実行委員長 中柴 有紀

10月23日、大東キャンパス祭が行われました。今年のテーマは「お茶リティー」でした。大東キャンパスがある、掛川の名産である「お茶」と、今年の3月11日に起こった東北太平洋沖地震で被災した方たちのために、私たちにできることはないかと考え、キャンパス祭での収益金を全額被災地へ送るという「チャリティー」の意味を込めました。

前日に雨が降ったものの、当日は天気にも恵まれ地域の方が大勢参加してくださり、各屋台の出し物がすぐに完売してしまうほど盛り上がりました。キャンパス祭での収益金は14万9130円となり、私たちキャンパス祭委員が責任を持ち、日本赤十字社を通して被災地へ全額寄付いたします。

キャンパス祭を開催するにあたって、土方地区の皆様、本大学の先生をはじめとする関係者様、そしてキャンパス祭実行委員をはじめとする学生の皆の協力を得て、無事にキャンパス祭を成功させることができました。最後になりましたが、看護学部同窓会の皆様から寄付していただいた5万円は、有効に使わせていただきました。ありがとうございました。

東京女子医科大学看護専門学校 文化祭実行委員代表 近藤 朋美・寺澤 里奈

学生自治会主催の第39回文化祭（N祭）が平成23年10月29日（土）に開催されました。

例年2日間にわたり開催されていましたが、今回のN祭は2年生が学生看護研究会に参加する関係で一般公開はできずに1日だけの学内での開催となりました。

第39回N祭のテーマは、3月11日におきた震災からの復活を願い、学年間の交流を深め団結したいという思いから『絆』というテーマを掲げ、各学年が交流し絆を深めることのできる企画をN祭実行委員中心に協力しあい、企画から運営まで創りあげてきました。

当日は看護や絆に関連する映画鑑賞会をし、各学年の交流会では、会食、ゲームなどの催しがありました。各学年合同での交流会では、普段なかなかゆっくり話ができない先輩から実習での苦労話や学校生活のアドバイスなど打ち解けて聴く機会にもなり、お互いの交流が深まったひとときでした。今回のN祭は病院関係者の方々や地域の方々をお招きすることができませんでしたが、学生間の絆を深める交流ができたN祭になりました。

最後になりましたが、開催するにあたりご支援くださいました看護系同窓会の皆様にご場をお借りして心よりお礼申し上げます。

ボランティア活動

東京女子医科大学看護学部 音楽部部长 山本芽生



私たち音楽部は、入院する患者様やそのご家族を対象としたコンサートに加え、入学式や卒業式、医学部白衣授与式、オープンキャンパスなど様々な大学行事にも参加し、音楽活動を行っています。部員は38人で渡邊由美子講師の合唱指導のもと、練習しています。今年度は入学式、医学部白衣授与式、オープンキャンパス、看護学部同窓会で活動しました。夏休みには国立身体障がい者リハビリテーションセンター、東京都リハビリテーション病院、七沢リハビリテーション病院脳血管センターでサマーコンサートを行う予定です。病院コンサートは看護実習とはまた違った立場で、患者様との関わる機会をいただき、貴重な経験をさせて頂いています。今後も部員一同練習に励み、病院コンサートでは患者様やそのご家族を少しでも音楽で癒すことが出来るよう頑張ります。

東京女子医科大学看護学部 Smile 部長 榎澤里依子



こんにちは、小児医療研究会の「smile」です。現在、3年生11人、2年生6人の計17人で構成されています。私たちは、変化の少ない病棟生活の中で、いつもとは違う楽しい時間を子どもたちに感じてもらうことを目的とし、本院の西B6階、小児科病棟のプレイルームで、月に1-3回、ボランティア活動を行っています。活動内容は、塗り絵、折り紙、絵本の読み聞かせ、またはプレイルームにあるおもちゃを使って、安全に配慮しながら一緒に遊ぶことです。基本的には、子どもの要望に合わせて随時やりたいことができるように心がけています。折り紙で折ったものや、色鉛筆やクレヨンで描いた絵は、それぞれ持ち帰ることができるので、子供たちはとても嬉しそうにして帰っていきます。その姿には、私たちが癒され、そして元気をもらっています。Smileは、1日1時間という短い活動時間の中で、病気と闘う子供たちと触れ合い、多くのことを感じとることができる、そんなやがいのある部活で、みんな生き生きとボランティア活動を行っています。

東京女子医科大学看護学部 風の里2年 古川直子・三杉 和

私達は、2011年秋ごろに、以前実習で訪れた老人ホームへとボランティアへ行った。担当した施設は、10人くらいがグループになるユニット型になっていた。入所者の方々は、私達を温かく迎えてくれ、毎回とても楽しみに待っていてくれた。私達は、片麻痺で手がうまく使えない方や、失語症の方も楽しんでもらえるレクリエーション作りを目標に掲げて、塗り絵や景色の写真などを用いて、会話を楽しんだ。最初は、どのように話せば良いか悩んだ方でも、自然と輪ができて、笑みがこぼれた。失語症の方は、最初は気難しい顔をしていたが、傾聴することを意識すると、積極的にコミュニケーションをとろうとしてくれた。言葉では通じ合うことはできないが、表情や気持ちを汲み取ることがいかに大切かということが分かった。今回の経験は、私達が看護者として働くときに、どのようにコミュニケーションをとるのが良いかということ、そして、一人一人のニーズに応えられるような様々な人と試行錯誤するという行動こそが大切だということが分かり大変良いものであった。

————— 東京女子医科大学看護系同窓会 研究助成金応募要領 —————

1. 研究助成の趣旨

本助成金は、東京女子医科大学看護系同窓会員が、臨床の場で行う研究を助成し、臨床で働く看護師の研究への意欲を向上させることを目的とする。

2. 募集条件

- 1) 研究の主たるメンバーが、東京女子医科大学看護系同窓会員であること
- 2) 臨床で勤務している者（施設は問わない）
- 3) 研究の成果は、第一に東京女子医科大学看護学会学術集会での発表または、東京女子医科大学看護学会誌に投稿すること
- 4) 看護研究成果は要約して（1,200字程度）会報で報告すること
- 5) 大学院生、研究職は除く（ただし、臨床看護職者との共同研究においては可）

3. 助成金額：1件につき、5万を限度とし、年6件まで。

4. 申請書の内容：研究課題、研究目的、研究方法、倫理的配慮、研究計画（進行予定表）

助成金の用途（できるだけ詳細に記入のこと。会議費、学会参加費、交通費は除く）

————— 学生ボランティア活動助成金応募要領 —————

1. 学生ボランティア活動支援の趣旨

東京女子医科大学看護系同窓会では、学生のボランティア活動を応援するために補助金を交付する。

2. 応募資格

- 1) 東京女子医科大学看護学部（河田町・大東キャンパス）、看護専門学校で学んでいる部活動、サークルであること
- 2) 医療施設・老健施設でのボランティア活動であること

3. 助成金額：活動内容により同窓会理事会で検討する。

————— 研究助成金・学生ボランティア助成金選考方法・申請について —————

1. 選考方法

同窓会理事会において慎重に考慮の上決定し、連絡する。

応募した申請書書類は返却しない。

2. 応募締め切り

第1回 平成24年11月末日（東京女子医科大学看護学会学術集会への発表や投稿は平成25年～26年度に行う、また平成26年度または27年度総会において報告を行う）

第2回 平成25年6月末日（上記学会への発表や投稿は平成26年度に行う、また平成26年度または27年度総会において報告を行う）

3. 申請方法

いずれもメールで必要書類を請求し、必要事項を記載の上メールで申し込むこと。

申請書・報告書様式は下記のPDFまたはWORDをご利用下さい。

正会員・学生会員支援担当

<問い合わせ先>

中山 喜美子：knaka@kc.twmu.ac.jp

小川 久貴子：ogawa.kukiko@twmu.ac.jp

東京女子医科大学看護系同窓会会則

第1章 総則

(名称)

第1条 本会は、東京女子医科大学看護系同窓会と称する。

(目的)

第2条 本会は、会員相互の啓発と親睦を図り、看護専門職者として看護の発展と社会に貢献すると共に、東京女子医科大学の看護の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1) 会員相互の啓発および親睦
- 2) 会報の発行
- 3) 学校法人東京女子医科大学看護系への支援
- 4) 前各号に準ずる活動

(事務局)

第4条 本会は、事務局を東京新宿区河田町8番1東京女子医科大学看護学部に置く。

第2章 会員

(会員)

第5条 本会は、次の会員をもって組織する。

- 1) 正会員 次の東京女子医科大学看護系の卒業生
附属産婆看護婦養成所、東京女子厚生専門学校、附属看護学院、附属准看護学院、
附属看護専門学校(旧附属高等看護学校)、看護短期大学・専攻科、附属第二看護専門学校
(旧附属第二高等看護学校)、看護専門学校、看護学部、大学院の卒業生
 - 2) 学生会員 看護学部、看護専門学校、大学院に在学中の者
 - 3) 賛助会員 東京女子医科大学の現旧職員、認定看護師教育センター生で理事会が承認した者
 - 4) 特別会員 本会の事業を援助したもので、理事会が入会を承認した者
その役職の任期終了時点で会員の任期を終える
2. 会員は改姓、住所変更が生じた際には、速やかに本会に届け出なければならない。
3. 会員が本会の名誉を毀損し、または本会の目的、主旨に反する行為をとった場合には、総会の議を経てこれを除名することがある。

第3章 役員および顧問

(役員)

第6条 本会には、次の役員を置く。

- 1) 会長 1名
- 2) 副会長 若干名
- 3) 監事 2名
- 4) 理事 若干名
- 5) 代議員 若干名
- 6) 相談役 若干名

(役員の選出)

第7条 会長、副会長、監事、理事および代議員は、総会において承認を得る。

(役員の任務)

第8条 役員の任務は、次に示す通りである。

- 1) 会長は、会務を総括し、本会を代表する。
- 2) 副会長は、会長の職務を補佐し、会長に事故のある時は、会長の職務を代行する。
- 3) 理事は、理事会を組織し、その決議により本会の活動を運営する。
- 4) 監事は、本会の会務や会計を監視・監査する。会務や会計に不祥事が生じた場合は、これを総会にて報告する。
- 5) 監事は、理事・代議員などと兼ねてはならない。

(役員の任期)

第9条 役員の任期は、次の通りとする。

- 1) 一期3ヵ年とし、再任を妨げないものとする。ただし継続して再任は2期までとするが、代議員はこの限りではない。
- 2) 役員は、任期終了後も後任者が決定するまで、その任務を行う。
- 3) 欠員の補充によって就任する役員の任期は、前任者の残任期間とする。

(役員の解任)

第10条 会長は、次の場合において役員を解任することができる。

- 1) 会員の2/3以上の解任請求が生じる場合。
- 2) 任務に耐えられない状況やその他やむをえない事情が生じ、理事会がそれを認めた場合。
- 3) 代議員は、代議員会に2年間出席していない場合。

(顧問)

第11条 本会に顧問を若干名おおくことができる。

2. 顧問は、理事会の承認を受け、会長がこれを依頼する。
3. 顧問の任期は3ヵ年とする。

第13回 東京女子医科大学看護系同窓会 開催予定

日 時：平成25年(2013年)6月8日(土)

場 所：東京女子医科大学看護学内 ※詳細につきましては、後日お知らせいたします。

★お知らせや会報などを円滑にお届けできるように、姓名・住所・所属・連絡先などに変更が生じた場合、出身校(A～F)会員番号を書き添え、速やかに同窓会事務局までお葉書またはファックスにてご連絡ください。ホームページより所定の用紙をダウンロードできます。

★本同窓会のホームページをご覧ください。 <http://www.dosokai.ne.jp/kangokeidousoukai/>

第9回 東京女子医科大学看護学会学術集会のご案内

日 時：平成25年(2013年)10月5日(土) 9:30-17:00 受付開始：9:00

場 所：東京女子医科大学 弥生記念講堂

学術集会テーマ：看護と言葉ーリベラルアーツの視点から

大会長：東京女子医科大学看護学部 田中美恵子

HPアドレス：<http://www.nrctwmu.jp/>



物故会員

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

安達(旧姓：謙山) ミサヨ様

木村 義江様

佐野(旧姓：白倉) 恵子様

住所変更届のお願い

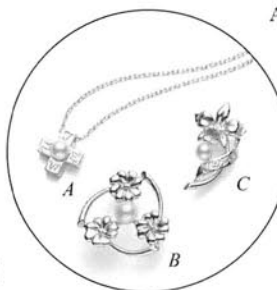
住所変更のあった方は、ホームページ
(<http://www.dosokai.ne.jp/kangokeidousoukai/?menu=cms1>)
にて住所変更受付をお願いいたします。

東京女子医科大学看護系同窓会スクールジュエリー

ミキモトが東京女子医科大学看護系同窓会のためにおつくりしたスクールジュエリーをご紹介します。英文の校名のイニシャルであるTWMUを美しくあしらったクロスのパendantをはじめ、創立者の吉岡彌生先生のお好きだったカトレアの花をモチーフにしたピンブローチや、巴をイメージし、葉の一枚一枚をハート形にデザインした四つ葉のクローバーのブローチなどです。学生時代の記念に。また、母校の誇りとして。おつけいただく方の美しさを引き立てるとともに、思い出のひとつひとつが胸元で囁きます。この機会に是非お求めいただき、いつまでも大切にご愛用ください。

申し込み・お問い合わせは下記のスクールリング係へ

ミキモト本店：〒104-8145 東京都中央区銀座4-5-5
TEL 03-3535-4661



- A ペンダント
パールサイズ 約5.00mm
チェーン 約43mm(アジャスタ付)
K18製 ¥33,600
銀製 ¥15,750
- B ブローチ
パールサイズ 約5.50mm
K18製 ¥47,250
銀製 ¥23,100
- C ピンブローチ
パールサイズ 約4.50mm
K18製 ¥39,900
銀製 ¥21,000

東京女子医科大学看護系同窓会スクールグッズ



クリアファイル
(透明・黄色・赤・紫・緑)
1枚 ¥50



お買い求めは
同窓会委員まで
バッグ
1個 ¥500

皆様からの
お買い求めを
心よりお待ちしております！

編集後記

6年間の会報作成を通して同窓生の多くの方とつながることができ、同窓生のひた向きの看護への取り組みや人生への心意気を感じました。そして一緒に会報作りをした仲間に心から感謝・感謝!!

代議員よりつづいて理事となり6年の任期を終え毎月校舎に足を運ぶことが終わるかと思うと安堵感と寂しさが交差します。一人でも多くの卒業生に会報をお読み頂き同窓会に思いを寄せていただけるよう今後もよりよくお願い致します。

2期の6年間、会報を担当し女子医大の看護の歴史の編集に携わりました。今になり、女子医大の看護という木全体が見えた思いです。更に諸先輩達に畏敬の念を深めました。今後は、代議員として勤めさせていただきます。よろしく申し上げます。

先輩方の軌跡のすこさ満ち溢れる昭和40年代の看護の歴史。当時を直接教えていただき、イッパイ想像して幸せな気分になりました。今では普通のことでも、先輩方が拓いてきたことだと知り、心にグッとくると同時に希望も膨らみます。最後に、原稿をご執筆いただいた皆様方に感謝申し上げます。

女子医大の看護の歴史の編集作業に携わらせていただき、当時を知る方の言葉を文字に残すことの貴重さを実感いたしました。今後もこれまでの諸先輩方の熱い志を受け継ぎ、ご指導賜りながら、会員の皆様喜んでいただけるような会報づくりに尽力したいと思います。